

中山 剛史

今回の連続パネル企画「思想としての生命」の趣旨は、近代科学における生命の物質化、対象化、因果的説明等々といった趨勢の中で、生命や心を物質に還元する物理主義に陥ることなく、また精神を物質から独立した実体として立てるような二元論に陥ることなく、新たな「生命」概念をいかにして捉え直すかという問題提起に基づくものと筆者は理解している。パネリストを務めた郡司ペギオ幸夫氏と沖永宜司氏の両者に共通しているスタンスは——それぞれモノとコトとの「双対性」、および「創発」という視点から——単なる物理主義や二元論的な生命観を克服しようと試みているという点であろう。

郡司氏の提題では、モノとコトの区別・齟齬を乗り越えるような斬新な「生命」理解が提示された。郡司氏が「モノ」を問題とするとき、ここでは部分と全体、原因と結果、構造と機能との「双対性」がキーワードとされている。これに対して「コト」とは、「モノの総和から転回される全体としての様相」であり、そこにはつねに外部性と他者性が孕まれている。その際に、両者の相違を際立たせると、二元論に陥ってしまうのであり、その反対に「コトをモノ化する」というのもいま一つの逸

脱であるとされる。そこでこの両者をどう「接続」するかという問題が重要となってくる。まさしくこのモノとコトの「接続」にこそ、沖永氏の提起する「創発」の問題との接点があるのではなかるうか。筆者から見ると、こうした郡司氏の言説全体が、「一人称としての「わたし」というパースペクティブを括弧に入れた、いわば三人称的なパースペクティブを前提とした語りであるように思われるが、こうした点に関する議論は、必ずしも十分に噛み合ったとは言えない。

沖永氏の提題では、生命や心を物質に還元する「物理主義」でも、心（もしくは生命）と物質とを異なった実体として捉える「二元論」でもなく、単なる物質の総和を超えた、それ自身自律性をもつ全体が新たに出現するという「創発」の概念に焦点が当てられ、生命概念をこの「創発」から捉え直そうとする試みがなされた。こうした創発現象においては、物質的要素の総和ではない非物質的な全体としての「何か」が問題とされていた。機械論的な生命観を超えるこうした「創発」は、ベルクソンの「エラン・ヴィタール」による「創造的進化」から始まり、それを心や意識にまで拡大解釈すると、ヴァレラらのオートポイエシスの問題やチャルマーズらの「心の哲学」に当てはまるという壮大な射程をもつものであるとされる。

こうした「創発」が当てはまるものとして、有機体、生命、さらに意識（心）が順に取り上げられているが、これらのものが同列に扱われうるのかどうかという問題が筆者の第一の疑問

点であった。筆者の疑問点の二点目は、沖永氏の提題では、物理主義や還元主義とは全く異なった「創発」の立場から、一人称としての「わたし」を消去しようという試みがなされているが、こうした一人称の消去はどのようにして正当化されるのかという点である。三点目は、因果論的な概念枠の撤廃という「転換」が問題とされていたが、こうした「概念枠の転換」は具体的にどのように遂行されるのかという疑問である。

以上のような疑問点も含めてさまざまな討論がなされたが、フロアとの質疑応答のやりとりの中で、郡司氏の「双対性」の議論からは相互依存関係としての「縁起」の問題が、また沖永氏の「創発」の議論からは、「モノでも心でもない動的な動きとしての生命としてのコト」といったモチーフが浮かび上がった。このように「生命」をめぐる議論のオオスの中からわれわれの想像力と創造力とを刺激するようなモチーフが立ち現れてくることそれ自身が、まさに「創発」の現象の象徴であり、そしてまたモノとコトとの「接続」の現場の象徴であるように筆者には思われた。

いずれにしても、「生命」という問題をめぐって、全く異なる専門の者同士が領域横断的に議論を闘わせるといふ今回の試みは、「比較思想」の新たな方向として未知の可能性を秘めていると言いうるのではなからうか。

(なかやま・つよし、実存哲学・倫理学、玉川大学文学部教授)